

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	星と星（俳句）
Author(s)	亭歸子
Citation	龍南, 175: 109-109
Issue date	1920-06-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6997">http://hdl.handle.net/2298/6997</a>
Right	

## 砂原の朝

白

椿

砂原歩む朝はさやけき水の音なり  
犬は犬は朝の砂原踏みくきたり  
我等の体操雲雀の聲に足並揃ひ  
雲雀に啼かれ土手の馬鼻ひれり  
蝶は空に舞ひ農夫ひたすらに鋤打つ  
晝餉の農夫空の高さにあくびしたり  
夜風淋しく城趾の堀に星の輝き  
芹摘みの女の唄に湖のなぎよう  
春のまひる湖畔の牛の眼に會へり  
茶色の牛の尻尾振る音淋しい湖畔  
口笛面白く湖畔のよむぎ摘み暮れたり  
馬車笛こだまして山の湯淋しい春のくれ

## 星と星

亭

歸

子

みんな眠れる夜に星と星とが瞬き合ひ

夜更けしブリツヂをカラコロと寒い音たてゝ  
はがらはがら馬の鈴に春の野は暮れ  
障子は開かれ病める父に星はかいやき  
空の奥を覗き込む様な山の端にねし心地  
渡し渡る子等母を焼く煙に泪ぐみ  
もう見ぬまいと思ふ火葬場の煙無心にのぼり  
鶯來啼けば病める父にも春あたゝかみ  
夕日ひそやかに鶏等鳥屋に歸り行き  
薪割の男汗もぬぐわす上も仰がず  
日を追ふて出し月の圓さあかるさ  
旅の女が肉賣りに來し村の夕べなか

## 五句

瀬戸正雄

大蘇峰煙の中に朝日哉  
鶯やまゝごと止めて子ら二人  
赤毛套敷いて花見の四位公卿  
春の水じつと見つめて若人ひとり  
驟雨一過世新生の爽かさ